

森のちやれんがニュース

2021 冬

北海道博物館
HOKKAIDO MUSEUM

Newsletter vol.26



令和3年度アイヌ工芸品展 北海道博物館第18回企画テーマ展 「アイヌの暮らし — 時代・地域・さまざまな姿」開催

日本の先住民族アイヌは、それぞれの時代それぞれの地域の社会背景に影響を受けながら暮らし、今日までその歴史をつないできました。本展では、時代や地域、作成者や使用者が明らかな「モノ」とともに、当時の写真や出来事、作成者や使用者のストーリーを示すことで、「モノ」の背後にあった人々の暮らしや歴史の流れが伝えられました。使用者や作成者の記憶を受け継ぐ方による文や語りも展示され、つながる「今」も強く感じられました。

図録は、鮮明で力強い「モノ」の写真、15名の著者による論考やエッセイ、対談などがまとまった300ページの大作

です。当館のミュージアムショップでは、好評につき売り切れとなりましたが、当館図書室でお読み頂けます。

2022年1月15日～3月6日には、群馬県立歴史博物館にて巡回展が開催されます。当館で見逃した方もリピーターの方も、ぜひ足をお運び下さい。

(学芸員 渋谷美月)



樺太のアイヌが太平洋戦争終戦後の引き揚げの際に持ってきた煙草入れ



CONTENTS

- ② **収蔵資料紹介**
「ロッペン鳥」って、どんな鳥？
- ③ **総合展示紹介**
3テーマ「北海道らしさの秘密」四季のくらしに展示している「げろり」について
- ④ **研究活動紹介** 利尻島の海女
- ⑥ **解説員 冬の活動報告**
展示室 再開しました
コロナ禍にめげず、博物館実習を実施しました
- ⑦ **アイヌ民族文化研究センターだより**
アイヌ文化巡回展 長万部で開催しました(10月)／幕別町で再開します(2月～3月)
「森のちやれんが50周年フォトコンテスト」作品募集中！
- ⑧ **活動ダイアリー** 2021年9月～11月の記録
「森のちやれんが50周年フォトコンテスト」のお知らせ

収蔵資料紹介

「ロッペン鳥」って、どんな鳥？

表 溪 太

研究部自然研究グループ 学芸員



「ロッペン鳥」の剥製（全国樺太連盟寄贈）

北海道博物館では、1945年まで日本が統治していた南樺太（現ロシア・サハリン南部）からの引き揚げ者らでつくる全国樺太連盟が、2021年3月に解散したのにもとない、資料の一部をご寄贈いただきました。現在、博物館資料として登録するための資料整理作業を進めているところですが、寄贈されたものの中から「ロッペン鳥」をいち早くご紹介します。

「ロッペン鳥」は、ウミガラス (*Uria aalge*) の樺太での呼称です。独特の鳴き声から「オロロン鳥」の愛称でも親しまれています。遠目に見るとずんぐりした体型に白黒のツートーンカラーでまるでペンギンです。実際に、ペンギンのように水中を羽ばたいて潜水し魚を捕えますが、ペンギンと違って空を飛ぶこともできます。

ウミガラスは、かつては松前小島やユリ島・モユリ島などでも繁殖していましたが、今では国内の繁殖地は天売島だけになっています。1960年代には天売島に約8,000羽が飛来していたと推定されていますが、その後に激減し、2000年代にはヒナの巣立ちがまったく確認されない年が続きました。そのため、繁殖地への模型を使った誘導や天敵の排除などの対策がとら

れ、近年は20羽以上が巣立つようになっていきます。

樺太中部に位置する海豹島^{かいひょう}は、ウミガラスの一大繁殖地として知られていました。この海豹島のオランダ名「ロッペン (Robben) 島」がロッペン鳥の名前の由来です。（ちなみに、海豹島はオットセイの繁殖地でもあります。」「Robben」やその直訳の「海豹」はアザラシのことです。鳥を名付けた人が両者を混同していたのかもしれませんが。）当時の書籍には、「海豹島はロッペン鳥の有名な繁殖地で、東部アジアに棲息するロッペン鳥の大部分がこの島で繁殖する。六月中旬の最盛期には数十万羽の大集団を見ることができるとあります（岡田宜一「樺太の鳥」

昭和15年発行）。剥製とともに寄贈された絵はがきを見ると、崖の上を埋め尽くすウミガラスの写真が使われており、オットセイの大集団とともに「樺太の奇観」として観光名所になっていたようです。また、卵を大量に採っている様子も記録されており、貴重な蛋白源になっていたのかもしれません。

この剥製は、引き揚げ者の方が樺太から脱出する際に携えるものを選んでということからも、大事にされていたことがうかがわれる品です。剥製や写真などの実物は、総合展示室2階のクローズアップ展示コーナーで、期間限定で公開しています（2021年12月18日～2022年4月14日）。



当時の樺太の絵はがき。崖の上にはウミガラスがびっしり。（全国樺太連盟寄贈）



卵採りの様子。二段に積まれた籠の中にはウミガラスの卵がどっさり。（全国樺太連盟寄贈）

総合展示紹介

3テーマ「北海道らしさの秘密」四季のくらしに 展示している「げろり」について

舟山 直治

研究部生活文化研究グループ 学芸員

北海道博物館の来館者サービスには、おもに展示観覧前の解説として、講堂で行う学校団体向けのグループレクチャーがあります。私は、展示を担当した3テーマの「四季のくらし」や「三等客車」を中心に、年に数回ですが、小学校3年生や4年生に向けて解説をしています。

このグループレクチャーの持ち時間は20分から25分程度ですが、学芸員の専門性など個性がでるものです。私の場合は、移住者の衣食住、三等客車の乗客が着ている防寒衣、ストーブや除雪具のいろいろ、冬の遊び道具などについて、時間に追われながら解説しています。そこで時間が押していたとしても必ず紹介しているのが、標題にあげた「げろり」です。

「げろり」は、周辺に15点余の展示物があって、目立たない資料といえます。しかも、資料名の語感だけでは、実物と結び付かないものもあります。見た目からは、写真のように、下駄にブレードを組み合わせたスケートと解釈できます。しかし、現在では、名称から下駄スケートを連想できる人はいないでしょうから、つい死語となった資料として一押ししてしまいます。

写真の「げろり」は、1969（昭和44）年に稚内市から収集したものです。当館の前身にあたる北海道開拓記念館の「収蔵資料台帳」や「生活分野記録票」の名称には、堂々と「げろり」と記され、その後の追書きに「（下駄スケート）」と補足されています。50年ほど前には「げろり」という言葉を知る世代が博物館にいたのだなと、思いをはせますが、私は不分明でした。

この「げろり」という語彙は、『日本国語大辞典』によると、「氷滑りや雪道滑りのための下駄」と記されています。しかも同辞典によると、「げろ

り」の呼称は、『北海道方言集』（1955）だけではなく、『民間服飾誌履物篇』（1933）には福島県会津地方、『福島県方言辞典』（1935）には同県浜通地方、「信州佐久地方方言集」（1941）には長野県佐久地方で採録されています。『東信濃方言集』（1976）によると「げろりい」、「げろりん」という呼称が長野県佐久地方にみられるようです。「げろ」という呼称は、『野辺地地方方言集』（1936）には青森県上北郡、『東信濃方言集』（1976）には佐久地方で採録されています。一方、私自身、1993（平成5）年に青森県で水神調査をした際の野帳に、東津軽郡平内町で「べんじゃ」、上北郡野辺地町で「きんぺい」、当時三戸郡南郷村（現八戸市）で、「走り下駄」の呼称を記録しています。ただ、このような氷雪滑りの名称やその分布は、これらの地域に限らず雪国一帯に伝承されていた冬遊びの民具と考えています。

「げろり」について、『北海道開拓記念館常設展示解説書6』（1978）には「ゲタスケート、ゲロリ、ベツタリなどと呼ばれ、げたの裏にかじ屋で作ってもらったカスガイをうちつけたようなもの」とあります。また、『とどまつ』（No.4、1993）には、次の説明があります。

（前略）下駄スケートとげろりとが元来同一のものかどうかは明ら

かではない。また、げろりという言葉は、長野県、福島県、青森県、北海道などで使われる方言であるが、その語源は不明である。

げろりという言葉が文献に出現するのは安政元年（一八五四）で、箱館御役所から「げろりそりで坂をすべる子供の遊びは危険なのでやめるように」というお触れ書が出ている。また、それより五十年ほど前の箱館、松前の風俗を記録した「蝦夷島奇観」には、子供たちが下駄を履いて坂をすべる絵が描かれている。（後略）

このように、「げろり」と下駄スケートの形態や名称の語源についても実是不詳です。しかし、事実として確認できることは、18世紀末の道南地方では、下駄履きの坂滑りの様子が絵画に描かれていたこと、また19世紀中頃には「げろり」などで坂滑りすることが禁止になっていたということです。

坂滑りの場面を改めて見直すうちに、「げろり」の形態は、『日本国語大辞典』にあるように、氷雪を滑るための「下駄」そのものだったのではないかと考えるようになりました。その答えの手がかりは、写真の下駄裏の船底型にあるのではないかとあたりを付けているところです。ただし、この説はすぐにこけるのかもしれない。



写真 「げろり」（下駄スケート）、収集地：稚内市、収蔵番号4,040

研究活動紹介

利尻島の海女

会 田 理 人

研究部生活文化研究グループ 学芸主査



1974年長野県生まれ。2003年から当館職員。専門は産業史（漁業）。写真は、ハンスオン資料「リンリン 黒電話」を解説しているところ。



写真1 利尻産のおみやげ用テングサ

暑い季節の風物詩、トコロテン。お菓子作りに使われる寒天。その原料となる海藻が、テングサです。南の暖かい海のイメージが強いテングサですが、かつては北海道も有数の採取地の一つでした。主な採取地は日本海側。渡島半島、積丹、留萌、利尻・礼文などで、利尻・礼文は国内採取地の北限です。



利尻のテングサ漁のことを調べるために文献をめぐっていて驚きました。明治20年代後半ごろから、テングサ採取のために三重県から海女たちが出稼ぎに来て、利尻の海に潜っていたというのです。

明治期の『伊勢新聞』を調べてみると、1893（明治26）年7月7日付記事で、前年（1892年）から三重県志摩市御座

地方の「海士六十余名」が利尻島へ向け出発したこと、利尻がテングサ、コンブ、ウニの豊富な島であることを報じていました。また、同月21日付記事では、三重県から利尻島に視察旅行に出た人物が、テングサを採るため志摩市越賀地方の海女30余名を伴って利尻にやってきた三重県出身者に会ったこと、離島の際に志摩市前島地方より来島した別の海女30余名を見たことを伝えています。

海女たちはなぜ利尻島にやってきて、なぜテングサを採ったのでしょうか。



明治期の中ごろ、三重県志摩地方沿岸の磯荒れが顕著となり、テングサ資源が減少したこと、中国輸向け寒天の需要が高まったことで、原料となるテングサの需要が増大したことなど

が、当時の志摩地方の海女出稼ぎの要因と考えられます。『伊勢新聞』が伝えているように、利尻の豊かな資源に目をつけて、はるばる海を渡って来たのでしょうか。それにしても、利尻の豊かな水産資源に関する情報ネットワークが、遠く三重県志摩地方にまで達していたとは驚きです。

『小樽新聞』1906（明治39）年8月3日付記事によると、海女は、「ポケット付の短褌一枚を被り硝子張の眼鏡」をかけた状態で、らせん状に遊泳して海底に潜り、呼吸の続く限りテングサを採取。ポケットに入れて浮きあがって



写真2 利尻町仙法志地区でのテングサ採り（2008年8月撮影）



写真3 テングサかき（2008年8月撮影）



写真4 三重県志摩市越賀の海とテングサ干し（2009年撮影）

きて、海面の桶状の容器に入れる。これを「一時間づつ一日三回だけ就業」していたようです。

海中に潜ってテングサを採る海女と、道具を用いてテングサを採る男性たちとの間には、しばしばテングサ資源や利益をめぐる紛争が生じ、海女を排除しようとする動きも伝えられています。利尻では海女によるテングサ採取は昭和初期まで行われたといえます。



もうひとつ、利尻の海女の活動を探るうえで、興味深い事例があります。1913（大正2）年から1918（同7年）にかけて、北海道水産試験場が利尻島沖合に生息するアワビの増殖を目的に、「種アワビ移殖」試験を実施した事例です。

注目すべきは、この試験を実施するにあたり、水産試験場が試験の初年度にあたる1913年の春に海女二人を雇い入れた点で、三重県志摩地方からこの年に初めて利尻に来島した海女でした。

この年に雇われた二人の年齢は、22歳と23歳。利尻島では杓形村（現在の利尻町）に居住し、テングサ採取に従事していたといえます。故郷では真珠貝の移殖に雇われた経験があり、来道の前年までは朝鮮でアワビ採取に従事していたという経験の持ち主でした。

1918年の試験まで、利尻島の海女が種アワビの採取や、利尻・礼文島沖合

への放入に従事していたことがわかりました。



なぜ、移殖試験が実施されたのでしょうか。明治期の中ごろ、箱メガネの普及と漁業者の増加はアワビの濫獲を招き、その結果として、北海道のアワビ資源の減少が著しくなったことから、水産当局や漁業組合はアワビ資源の保護・増殖策を講じる必要に迫られていました。1892年（明治25）年の『北海道水産予察調査報告』によると、箱メガネはこの時期に使用されはじめたもので、海底の様子を確認するのにもっとも「簡便」な道具であること、

そのためアワビを取り尽くす恐れがあることから「規約」を定めて使用を禁止する地方が多い、と伝えています。1895（明治28）年1月19日の「北海道庁令第2号」によってアワビ採取に規制をかけて、資源の保全をはかることを試みるのですが、良い成果は得られなかったようです。

利尻・礼文島の沖合でも、アワビ資源の減少に歯止めをかけることができなかったことから、水産試験場では次の一手として他の海域で採れたアワビを移殖することにしました。

この試験の報告書を読む限りでは、水産試験場側は、海女の手による「のみ」を使って採取した種アワビにこだわりました。「かぎ」と呼ばれる道具を使って、種アワビに傷がつくのを恐れたからです。アワビ採りの経験が、思わぬところで活かされたというところでしょうか。



残念ながら、利尻の海女経験者は皆亡くなられており、当時のことを直接お聞きすることは不可能となってしまいました。それだけに、これまで以上に海女に関する諸々の資料を収集して、北海道の磯まわり漁業と海女の関連を明らかにするため、努力を積み重ねていきたいと考えています。



写真5 利尻町の漁師さんが使用していたアワビかぎ（2008年8月撮影）

解説員 冬の活動報告

展示室 再開しました

新型コロナウイルス感染拡大のため、北海道にはまん延防止等重点措置や緊急事態宣言が出され、博物館は一部の開館期間(7月13日～21日)を除き、5月～9月までずっと臨時休館していました。そしてようやく10月1日から開館することになり、待ちかねていた学校団体の皆様や一般のお客様が展示室に戻ってきました。今は毎日学校で訪れる子どもたちでにぎわっています。

私たち解説員も数か月ぶりに展示室の配置につきました。新型コロナウイ

ルス感染拡大防止のため、私たちは1日に数回展示室を消毒しています。子どもたちも慣れたもので消毒スプレーボトルを持った私たちが近づくとサッとよけてくれます。

館内には感染症対策として新たな機器も導入されました。玄関ホールには検温のためのモニターがおかれ、新型コロナウイルスが発生したときに備え連絡先をご記入いただくことも再開しました。展示室内には二酸化炭素(CO₂)濃度の測定器がおかれ、開館中

のCO₂濃度を常にモニタリングしています。

特別展示室入口には、室内にいる人数を自動でカウントする機器もおかれました。日頃見たことのない機器ばかりで私たちも感心したり使い方を覚えるのに戸惑ったりしています。いろいろと日常の不便は続きますが、早くコロナのないものとの状態に戻るといいですね。

(解説員 福島奈緒子)



総合展示室を消毒中



学校団体の総合展示室見学の様子



CO₂濃度測定器(総合展示室)

コロナ禍にめげず、博物館実習を実施しました

8月17日から29日までの10日間、道内外の大学から14名の博物館実習生を受け入れました。

折悪しく新型コロナウイルス新規感染者の増加傾向が止まない時期にぶつかり、出勤時の混雑を避けるために毎日の実習開始を1時間繰り下げる形に急遽変更しての開催。実習中はずっと臨時休館中で、博物館がどう利用されているのか直接見てもらえなかったのは残念だったものの、各研究グループ

職員の指導のもと、さまざまな資料の整理をしたり、野外観察会を企画したりと、例年とほぼ同様の内容に取り組みました。

打ち解けていなかった最初のうちは会話も少なかったのが、日を重ねるごとにやりとりがどんどん活発になり、「距離をとってね!」と注意を促す場面もしばしば。最終日の感想発表では、大学などでもなかなかお互いが顔を合わせて協同作業をすることがなく、と

でも貴重な機会だった、といった声がかれました。

三つの班それぞれで協力して作り上げた展示は、ようやく臨時休館が明けた10月1日から19日まで、来館者の方に見ていただくことができました。

この経験を今後につなげてくれることに期待しています。

(総務部企画グループ 学芸主査 山田伸一)



写真1 展示制作の実習



写真2 自然観察会の実習

写真をとおして、当館の建物としての魅力を再発見し学んでいただくきつ

活動ダイアリー

2021年9月～2021年11月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

9月1日(水)
■館内定例研究報告会を開催。発表者：各研究プロジェクトチーフほか。

9月15日(水)
■館内定例研究報告会を開催。発表者：東俊佑。

9月29日(水)
■森のちゃれんがニュース2021秋号(Vol.25)を刊行。

9月30日(木)まで
■新型コロナウイルス感染拡大防止のため臨時休館(第7回特別展「あっちこっち湿地～自然と歴史をめぐる旅」9月分会期も休止)

■ミュージアムカレッジ「札幌にもいた!? カワウソのお話」、「ちゃれんが古文書クラブ⑦」、講演会「湿原の自然誌と変遷」、子どもワークショップ「糸電話で、もしもしコンニチハ」、ミュージアムカレッジ「『民族音楽学入門』を開催中止。

10月1日(金)
■7月22日からの臨時休館を終了し、開館。

10月2日(土)
■ちゃれんが古文書クラブ⑧を開催。担当：東俊佑。

10月9日(土)
■道北巡回展「探してみよう! 地域のお宝」(美深町文化会館COM100)開幕。10月26日まで開催。

10月10日(日)
■ミュージアムカレッジ「新聞に見る『スペイン・インフルエンザ』」を開催。担当：会田理人。

10月15日(金)
■総合展示室クローズアップ展示②を展示入替。「アイヌを描いた絵師 早坂文嶺」(写真1)
■下記企画展「アイヌのくらし」報道向け展示説明会を開催。

10月16日(土)～12月12日(日)
■令和3年度アイヌ工芸品展・第18回企画テーマ展「アイヌのくらしー時代・地域・さまざまな姿」を開催。[1ページ参照]

10月17日(日)
■「アイヌのくらし」連続講座①「アイヌ文化

を見る目」を開催。担当：北原次郎太氏(北海道大学)。

10月23日(土)
■ちゃれんが古文書クラブ⑨を開催。担当：東俊佑。

■第11回アイヌ文化巡回展(長万部町学習文化センター)開幕。10月30日まで開催。[7ページ参照]

10月24日(日)
■50周年記念イベント「映画上映会 北海道開拓記念館ができたころ」を開催。担当：三浦泰之。

10月27日(水)
■館内定例研究報告会を開催。発表者：佐々木利和。

10月31日(日)
■「アイヌのくらし」連続講座②「後志地方のアイヌ民族が生きた近代」を開催。担当：大坂拓。

11月3日(水・祝)
■特別イベント「アイヌ音楽ライブ マレウレウコンサート」を開催。演者：MAREWREW(マレウレウ)。(写真2)

11月6日(土)
■子どもワークショップ「親子で探検! 森のコレクションをつくろう」を開催。講師：鈴木あすみ、表溪太、圓谷昂史、櫻井万里子。(写真3)

11月7日(日)
■「アイヌのくらし」連続講座③「名工の誕生：アイヌ工芸品に込められたメッセージ」を開催。担当：谷本晃久氏(北海道大学)。

11月13日(土)
■ちゃれんが古文書クラブ⑩を開催。担当：東俊佑。

11月14日(日)
■「アイヌのくらし」連続講座④「知られざる千島アイヌの歴史ー考古学が解明する文字記録以前のすがたー」を開催。担当：高瀬克範氏(北海道大学)。

11月17日(水)
■第69回全国博物館大会にて渋谷美学芸員

の論文が棚橋賞を受賞。

11月24日(水)
■館内定例研究報告会を開催。発表者：会田理人。

11月27日(土)
■ちゃれんがワークショップ「稲わらで縄をつくって、巨大人間あやとりに挑戦!」を開催。担当：池田貴夫・舟山直治。

11月28日(日)
■「アイヌのくらし」連続講座⑤「資料館をつくるーアイヌ民族によるアイヌ文化展示の歴史をたどるー」を開催。担当：小川正人。



建物部門

あなただけが知っている。
建物の魅力を教えてください!



北海道博物館
森のちゃれんが50周年
フォトコンテスト

2つの部門で写真を大募集!
建物部門 / 思い出部門

1 ウェブから簡単にデジタル応募・
2 現像写真そのまま持参(要予約)

募集期間
2021年11月10日①～2022年2月6日②

アルバムを開いて、思い出を
ふりかえってみませんか?

思い出部門

たくさんのご応募をお待ちしています!

森のちゃれんが50周年フォトコンテスト(※7ページの記事もごらんください)

応募資格 どなたでも(プロ・アマを問いません)

応募部門 「建物」/「思い出」

募集期間 2021年11月10日～2022年2月6日17:00

賞・記念品 最優秀賞 1名 賞状と記念品(10,000円相当)
各部門賞 数名 賞状と記念品(5,000円相当)

参加賞 全員(ただしウェブ応募でメールアドレスを記載した人のみ)
パソコン・スマートフォン用のオリジナル壁紙データ

応募方法・応募のきまりなど、詳しくはウェブサイト特設ページをごらんください。



森のちゃれんがニュース 第26号

発行日：2022年1月5日
編集・発行：北海道博物館
〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657
ウェブサイト <https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>
©Hokkaido Museum, 2022

来館者数

○2021年9月～2021年11月(9月1日～30日臨時休館)
総合展示室 21,980人 特別展示室 16,680人 はっけん広場 0人
○累計(2015年4月～2021年11月)
総合展示室 586,833人 特別展示室 416,821人 はっけん広場 120,784人